

◆ 2021 年 度 活 動 報 告 シ ー ト ◆

団体名：埼玉大学有機農業研究会

24A-24

代表者：代表理事・会長 葛西 文二

URL : <http://saitama.eco.coocan.jp/> <https://twitter.com/saidaihozyou>

1. 活動が必要とされた状況

学外の鴨川ほ場付近は、都市化の進展に伴い、農地が著しく減少しており、残された耕作地も管理されないため、特定外来生物等の野生生物（アライグマ、ハクビシン、タヌキ等）の絶好の生息場所化し、近年、作物への被害は拡大している。また、雑草等が繁茂したほ場は、ダニ等の病害虫の生息場所となってしまう、近隣住民への健康への影響も懸念される。このため、休耕地を有機農業により栽培活動を行うことにより、自然循環メカニズムを活かし、人間と生物が共生し、いのち響き合う場を創るとともに、市民と農家と学生が交流し、自然や環境、地域社会のあり方を学ぶ場を提供する必要がある。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

2021年4月～2022年2月まで、平均して週2日（夏は3日）計84日、栽培活動を行い、毎回平均7名（社会人3名、学生4名）が参加した。極力固定種の種子を調達し、自ら育苗して、春夏野菜、秋冬野菜について策定した作付計画に基づき作付し、収穫を行った。

3. 活動の成果

30種類以上の野菜を栽培し、昨年より収量も多く収穫することができた（新たに作付した作物として、ゴボウ、ショウガ、ピーマン、ズッキーニ等、質量ともに改善された作物として、ナス、ミニトマト、スイカ、里芋、台湾ヤマイモ、サツマイモ、白菜等）。ほ場は、雑草が繁茂するような状態はなく、土質も改善された。また、アマガエル、クモ、ナナホシテントウ等の益虫が生息している。学生は、栽培活動を通じ、有機野菜の美味しさ、自然の豊かさ、有機農業の素晴らしさを体験できた。



サツマイモ、里芋等の収穫



夏野菜の収穫



白菜の栽培

4. 今後に残された課題

大豆、インゲン、カボチャが害虫、肥料不足等が原因で生育状況が悪く、前年に比べ収量が減少した。有機農法に関する知見・経験を積み重ね、どのように管理するかが課題である。また、近隣住民（特に児童）と収穫等を通じ、触れ合う場にしていきたいと考えていたが、新型コロナウイルスの感染拡大もあり、実現できなかった。

アライグマ、ハクビシン等による食害も発生し、深刻化しており、獣害対策も検討する必要がある。